



がってんプロジェクトの起点と2019 中間報告

代表世話人 相楽 治

■子供たちの潟遊びを大人がダメにしている

何故「がってん(潟の再生・発展)」か?空苺菜の湖上栽培を始めたそもそものキッカケは、「子供たちがいつでも『舟遊び』ができる潟」の実現のためだった。



○一本松から浮島まで潟ウォーク

2014年から`18年まで官民10団体が参加するとの潟環境舟運実行委員会主催で、船で潟の湖上に設置した浮島カフェの上陸や遊覧、カヌー体験を実施してきた。私は実行委員長として、「毎年進化していくものにする」としていろいろ試みてきた。ところが、参加する子供のつぶやき「いつでもカヌーに乗れたらいいのになあ」の一言に、いったい大人の我々は何をやっているのだろうと愕然とした。大人たちのスポーツレジャーのための条件が整備されていても子供たちにそれは無い。そもそも、潟端に住んでいる漁協組合長の増井勝弘さんや空苺菜竹筏のデザインを指導してくれて先日亡くなられた小林正芳さんなどは、いつでも好きな時に好きな場所で自由に舟遊びや漁をして育った。そんな、自由な潟遊び、舟遊びをしてきたからこそ誰に教わるでもなく木舟の操船術を身に着け潟の魅力も怖さも知り尽くしている。地元の大野彦栄さんは風速〇mだからと言わず、「ウサギが跳びはじめたら危ない」と波の形で潟に出られるか否かを言い当てる。

それに比べていまの子供たちは大人の目を気にしながら小銭を片手に遊ぶしかない。潟遊びの醍醐味も知らない。なんと貧しい潟遊びになってしまったの

だろうか?それでいい訳がない。今思い返すと、「潟を使えるようになれば“潟の環境の魅力や奥深さを知り、潟を愛するようになる”」と甘い考えで子供たちのカヌー乗船体験をしてきたことに気付く。子供たちが日常的に潟中を楽しめる条件づくりを私たちは怠ってきたのではないだろうか?

■誰もが楽しめる、誇れる潟遊びの条件づくりを急ごう!

かつての自由で豊かな潟利用の姿まで復活するのは無理だとしても、市民の誰もが潟の魅力を感じ、学び、自慢できる湖上利用の条件づくりを進めたい。かつてのデートに使われた手漕ぎボートのように、いつでも子供や大人、観光客が舟遊びができる基盤や設備、指導・安全体制、マナーのある新潟独自の潟暮らし文化を育てたい。特に、棧橋が皆無の鳥屋野潟で始めたい!これががってんプロジェクトの最優先のテーマだ。

今のままの潟でも湖上を眺め、子供たちが舟遊びを自由に楽しみ、潟遊びの技を鍛錬できる最適な候補地が清五郎一本松付近の旧河口の浅瀬だ。そこに常時誰かしらの見守りの目がある潟辺の拠点港+舟小屋テラスが欲しい。私たちは人の見守る目の無い棧橋では“良い水辺空間”にならないことを栗ノ木川棧橋撤去で学んだ。“良い水辺空間”としての「港+舟小屋テラス」の実現ためには、多くの市民、多世代、子ども、女性、外国人、観光客などを潟中に誘い、潟の魅力の再評価を引き出すことが不可欠だ。特に、若い人たちには、従来のスポーツレジャーや環境教育利用などに加えて、障がい者レクリエーションや食材の水耕栽培、親水教育漁業、湖上アート、音楽など、湖面利用の新しい可能性にチャレンジしてもらいたい。私達老練がってんチームは、それを後方から応援することを享受したい。

■「もったいない栄養分」利用と湖上利用がワイズユース

豊かな潟利用のあった時代は、皆知り合いという

編集注:3ページ左側へ続く

■水辺レポート がつてんプロジェクト 2019年の活動



○4月:竹筏づくりワークショップ



○5月:がつてん基地での空芯菜育苗



○5月:浮島フロート12個組立進水



○7月:空芯菜コンテナ筏に設置



○7月:小4 湯の空芯菜栽培学習会



○8月:空芯菜料理コンテスト



○8月:鳥屋野湯の湖上活用実験ワークショップ



木舟板合せで浮島まで遊覧



E ボートとカヌーで浮島まで



○同上 WS:左/浮島シジミ汁試食会



中2枚/エジソンメガホン東新中のアート&交信実験 WS



右/山湯中科学部の透視度調査



○浮島での水質生物浄化研究:親松排水機場近くでの水質データで365日のチッソ負荷量と空芯菜栽培での吸収力の計算。空芯菜栽培53t分の負荷量があることから5.3t栽培で10%軽減できる。(吉川夏樹新潟大学農学部准教授の試算)



○空芯菜オーナーの収穫:年5~6回の収穫ができる。1株から約1kg収穫ができる。



○セラクリーンブロックの設置:地元企業から寄贈された水質改善浄化材



○空芯菜のヒゲ根生物生態調査:新潟大生の卒研でヒゲ根に生息するスジエビや小魚などの生物調査

編集注：1 ページからの続き



○「もったいない栄養分」の資源循環利用イメージ

地域での潟の限定的な小規模な利用で潟にかかる負荷も限定的だったはずだ。現在の鳥屋野潟の水質負荷は、かつてのレベルで復元するには絶望的なほど、都市人口の膨張と農業生産拡大で大きなものになっている。都市の生活排水は下水道技術や施設で100%近く解消しつつある。一方、潟の上流の水田約4000haから落ちてくる肥料分は、農業生産が続く限り最下流の潟に残る。湖沼基準のCOD5は、河川水の入水で辛うじてクリアしているが湖岸部ではクリアできていない。しかし、かつてのような水質に戻す具体的な再生計画を、私はまだ見たことがない。農漁業は、湿地保全のラムサール条約でワイズユースの1つとして認められている。湖上栽培の空芯菜は、流入するチツソを吸い上げて生育する。そのため、空芯菜を栽培し消費（食べる、加工販売など）する事は、チツソ分を潟の外へ排出（潟の浄化）し、潟の負荷を「もったいない栄養分」として資源に切りかえる重要かつ貴重な役割を担っている。この取組みが、「潟の舟遊び」を含めた新しいワイズユース「潟業」に育てばと期待している。

「潟業」で得た利益を潟に再投入する循環型のソーシャルビジネスを育て、潟の発展の持続可能性が展望できたとき、初めて鳥屋野潟のSDGs五方良し[※]の景色が見えてくる。私たちはそこにつながる潟展=がってん事業の条件づくりを急ぎたい。

※潟五方良し（水よし・住んでよし・商いよし・来てよし・子どもよし）

「とやの潟がってんプロジェクト」は（公財）こしじ水と緑の会、TOTO水環境基金、（一財）新潟県建設技術センター（五十音順）より活動助成を頂いています。

report 02

第18回通常総会の報告

2019年7月6日（土）新潟市市民活動支援センターにて「第18回通常総会」を開催しました。当日は24人が出席し、委任状含めて78人の出席がありました。

■平成31年度の事業報告・決算報告

当会が取り組む「美しい水辺の環境改善事業（信濃川・千曲川の鮭復活他）」「里潟学術研究事業（環境調査等）」「とやの潟魅力開発事業（がってんプロジェクト他）」「つうくり沿川まちづくりの会支援事業」「通船川河口の森管理事業」「水辺体験スクール事業（カヌー体験等支援）」「交流連携事業（他団体の事業への協力）」「鮭の道サポーター基金」について、平成31年度（2018/06/01～2019/05/31）の取組状況を報告するとともに、決算報告、監査報告を行い、これらについて承認をいただきました。

年間の活動（会議や準備等も含む）においては延べ159日の活動日数、参加活動人数2,110人がありました。

■令和元年度の事業計画・予算について

先にあげた各事業の令和元年度の事業計画を紹介するとともに全体の予算についても紹介し、事業計画・予算ともに承認をいただきました。

大きな取組として「とやの潟魅力開発事業」ではカヌーや舟の利用や水上体験の常設に向けたシェア型の拠点づくりや、「つうくり沿川まちづくりの会支援事業」では地域の方々が主体となった体制へのパトタッチがあげられます。

また、中村吉則監事からは「評価される活動は色々やっているが、これからは組織や活動が持続できるように事業に取り組んでいく必要があるのではないか」と問題提起がありました。

■役員の変更について

当会の役員は任期は2年としていることから、この総会で役員の変更を行いました。相楽代表世話人より候補者の紹介があり、世話人11人、監事2人の就任が承認されました。

これまで世話人を務めていただいた鈴木 哲さんは任期満了を持って退任し、新たに上杉 知之さん（にいがた花絵プロジェクトや新潟市青年ネットワークをリードしてきた実践者で現在新潟県会議員）が就任しました。

また、総会の閉会后、臨時世話人会を開催し、代表世話人・副代表世話人を互選しました。

その結果、これまでと同様に代表世話人には相楽 治さん、副代表世話人には梶 瑤子さん、加藤 功さん、山岸 俊男さんが就任することとなり、その結果を総会出席者へ報告し終了となりました。

事務局 杉山 泰彦

■水辺レポート

つくり沿川まちづくりの会 活動の様子 新潟県立大学生による 通船川ちえあ〜ず 作ろう編

1. これまでの経緯

つくり沿川まちづくりの会は、「つくり市民会議」（大熊孝会長:1998～2014年）を継承発展させたものです。「つくり市民会議」創設当時、通船川・栗ノ木川は新潟地震（1964年）後に低水路方式が採用され、建設後30年余を経て矢板護岸の腐食が進み危機的な状況でありました。その護岸改修にあたり、計画段階から地域住民の意見を取り入れようと「つくり市民会議」が創設され、行政と地域住民・沿川企業等の間で多くの議論を尽くしてまいりました。また1998年8月4日の内水洪水被害もあって、川・まちづくりが一体となった全国にはじめての試行が行われました。

護岸整備は、特に親水性に配慮され整備が進むにつれて、沿川の各小学校の総合学習で川環境への関心が高まり、子供達の発表の場所へと、変化してゆきました。

そして、会長が新潟県立大学山中知彦教授（2015～2017年）に交替し、活動はソフト面に軸足を移し、名称も「つくり沿川まちづくり」に変えて、県大生を中心に沿川のまちおこしや地域の課題解決の提案など変化してきました。その後山中教授が退官され、現在、県立大の小澤薫准教授（2018～年）が当会長を務めています。

2. 令和元年度の事業紹介

これまでは、沿川地域の課題、解決、提案形であった活動から、地域住民と一緒に行動活動する行動形へと変化してきていると感じています。

昨年は「地域の子育てをどう支えるか」と「沿川の内水洪水のしくみと対応」について座談会方式で地域住民、沿川企業の方々と話し合いました。

今年は、学生等が沿川を歩き、地域住民と話し合い住民と一緒に活動できることはないかと、話し合った結果、地域住民の方々が意外と川への関心度が低く、川の魅力や恩恵を享受しているが、意識にないことに気づきました。もっと川への関心を振り向けるにはどうしたら良いかを話し合い「川ベンチ」の製作を地域の方々と一緒になって作り、それを持参して川辺で、川の魅力や遊び、ゲームなどを体験して川のすばらしさを感じてもらおう企画を実行中であります。

3. 8月25日ベンチ製作編の様子

川ベンチ製作は、地域のJIFT（若手大工集団）の方々の協力を得て、10組の親子で10脚を製作する企画を実施しました。

当日は極暑が心配され、暑さ対策に細心の配慮をして臨みました。当日の天気は最高気温30度、薄曇りでしたが、風があり作業には支障なく実施でき、参加者は楽しみながら作業をしていました。

募集開始した頃は、3組しか集まらず心配していたが、当

日になって10組18名、11脚のベンチ作りが始まりました。

ベンチの材料は、座るところが建築材の端切れ材で、そこにドリルで穴をあけ、スチールの脚を挿入、ヤスリで6面を磨き角に面をとって塗装、各自が自由に絵や文字を描いて乾燥させて終了です。

製作作業は、至って簡単単純ですが、各作業の中で、親子の会話があり、指導員からの指導もあり、お互いに指摘しあい、ほめ合い、完成してゆく過程が、極めて重要であり、そこが楽しみでもあり、皆さんが熱心に、楽しみながら取り組んだ半日でした。



曲がり尺を使って脚の位置決め



親子での話し合い

4. 9月27日マイベンチによる乾杯編（計画）

先のマイベンチ製作した椅子を持ち寄り通船川の川沿いの思い思いの場所に腰掛けてみて、どこでの眺めが気に入ったか、どこがいいのか、気づいたことなど参加者で話し合い、川クイズ、ゲームなどをして川辺でのあそびを通して川辺への接近を図り、川からの恩恵、すばらしさ、楽しさなどを実感していただき、川辺の心地よさを再認識してもらおう企画です。

5. 今後に向けて

近年、地域の宅地化による世代交代が進み、地域の歴史や地理地形が見えにくく、水害などの災害意識が希薄になっています。また、住民の方々は自らの行動意欲が薄く、他人がやってくれるなら同意する風潮が強くなり、他人頼りです。これらを変革してゆくには、自らの地域の良さ、地域から受けている恩恵を再発見、再認識して改善してゆくことが求められています。

県大生を中心に、これからの活動の中で少しずつ改善していきよう、今後の活動に期待したいと思います。

すばらしさ、楽しさなどを実感していただき、川辺の心地よさを再認識してもらおう企画です。

副代表世話人 山岸 俊男



完成したベンチの前に記念撮影

身近な水環境の全国一斉調査 2019 調査から見た新潟市内 16 の潟の水質

■ 2001 年 - 信濃川水系 24 時間水質一斉調査

私が河川の水質調査に関わって今年で 18 年となります。最初の水質調査は、信州大学の名誉教授・沖野外輝夫先生の呼びかけの「信濃川水系 24 時間水質一斉調査」でした。

新潟水辺の会に入ったばかりで川のこともよく分からなかった私でしたが、信濃川河川事務所より送られてきた試薬の簡易バックテストのマニュアルを読みながら、家の近くの信濃川の本川大橋でバケツにロープを付けて水を汲み上げました。調査項目は COD（化学的酸素要求量）、NP3-N（硝酸態窒素）、PO4-P（リン酸態リン）、pH（水素イオン濃度）の 4 調査で午前 10 時に始まり、翌朝の 10 時まで 2 時間ごとに同じ場所で調査を 13 回行いました。

車で 5 分の場所でしたが、採水、バックテスト調査をやった家に戻ると 40 分が過ぎていました。それを 13 回繰り返すのですが、さすが夜中の零時を過ぎると 1 時間の仮眠では少しきつかったことが思い出されます。

真夜中の本川大橋上は煌々とライトに照らされています。一方、信濃川は真っ暗で水面は見えない中で採水でした。終わって信濃川河口方面に目をやると、多くの明かりが明るく輝いていたこと、同じ時間に同じ作業をこの信濃川の上流で多くの方々が係っていることに新鮮さを感じました。その時、川の水質は一定でなく、時間帯によって変化することも学ぶことができました。

翌年も 24 時間水質一斉調査に参加した関係で、その後の「身近な水環境の全国一斉調査」にも関わり、全国一斉調査も今年で 16 回となりました。現在の調査項目は、簡易バックテストによる COD、透視度、川辺のゴミ調査です。私たちは水質の専門家ではなく、アマチュアの団体です。その為測定数値のバラツキと信頼性を高めるために同じ場所で 3 回バックテストの調査を行います。更に低能度 COD は 8 以上の水質に対し 8 以上と結果が出るだけです。その欠点を補うため、特に水質の COD 値を知りたい場所については採水した水を容器に入れて公的機関に持参、公定法検査を行っていただき、実際の COD 値としています。

■ 身近な水環境の全国一斉調査 -2019

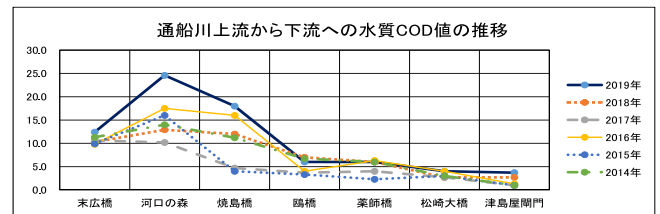
今年の調査は、新潟水辺の会ほか 3 団体、2 個人で、新潟市周辺の湖沼 17 カ所、河川 56 ケ所、合計 73 ケ所を行いました。河川調査は、上流と最下流で実施しました。

調査河川	調査数	0~3mgO/L未満	3~6mgO/L未満	6mgO/L以上
信濃川水系	23ヶ所	6ヶ所	10ヶ所	7ヶ所
阿賀野川水系	6ヶ所	2ヶ所	3ヶ所	1ヶ所
新川水系	13ヶ所	0ヶ所	7ヶ所	6ヶ所
湖沼	17ヶ所	0ヶ所	3ヶ所	14ヶ所
鳥屋野潟	4ヶ所	0ヶ所	0ヶ所	4ヶ所

2019 年新潟市水系別の COD の水質結果

■ 通船川の水質

新潟水辺の会で重点的に取り組んできた「どぶ川再生の通船川」では、流入口の津島屋開門から出口の山ノ下の末広橋までの 7 ケ所で、毎年水質調査をしています。上流の流入口付近の COD は低く、下流に行くほど高くなり山の下開門排水機場付近で最も高い値となっています。



通船川上流から下流の水質変化（2014～2019）

■ 新潟市内 16 の潟の水質

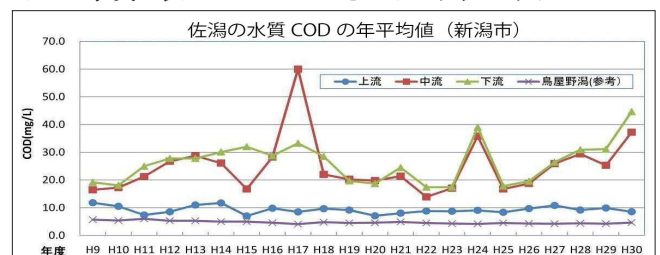
5 年前からは、新潟市内 16 の潟の水質調査を行っています。今年の河川の水質結果は思っていた以上に悪いものではありませんでしたが、湖沼の水質の悪化が目立つものでした。

環境省が毎年発表している全国 180 湖沼中、平成 29 年度で最も COD 値が高い宮城県の伊豆沼でも 11 です。佐潟は環境省の湖沼調査対象ではありませんが、COD 値がその数倍を超えている現状があります。

佐潟は、ラムサール条約登録湿地で冬は白鳥が多く飛来し、夏は蓮が多く咲くことで全国的に有名です。しかし、3 年前から蓮が少なくなり、昨年と今年は全く見られない佐潟となっています。そして夏場になるとアオコが発生し、潟一面緑となりアオコ独特の臭いさえ出ている佐潟の現状で、それが水質に表れているとしか思えない状況です。

新潟市の潟	COD値
ドンチ池	11.3
御手洗潟	63.3
佐潟(下潟)	26.9
上堰潟	9.3
仁箇堤	25.9
金巻の池	9.0
じゅんさい池	7.6
北山池	8.1
北上池	7.6
六郷の池、	3.9
鳥屋野潟	7.1
清五郎潟	6.9
福島潟	4.6
十二潟	6.4
内沼潟	21.5
松浜の池	5.8

新潟市内 16 の潟の結果



新潟市「第 4 期佐潟周辺自然環境保全計画」より

佐潟の後ろに角田山が見える姿は新潟市民の誇りであり、故郷でもあります。水質と蓮とは直接の関係性は薄いとは思いますが佐潟の水質を良くし、かつての様な蓮の多く咲く佐潟を見られるように、潟普請などのお手伝いをしていけたらと思っています。

副代表世話人 加藤 功

■水辺レポート

鮭の道サポーター基金終了のお知らせ 水枯れの大河信濃川・千曲川に、鮭の道を拓く

■「水枯れの大河信濃川・千曲川に、鮭の道を拓く」のタイトルを考えた石月 升さん

平成 18 (2006) 年 4 月、独立行政法人 地球環境基金より 3 年間の助成を受けて、「新潟の鮭を長野まで遡上させる活動」が始まりました。これは 3 年前に亡くなられた元副代表の石月升さん (1936 ~ 2016) の提唱で、鮭の遡上する河川調査、河川物横断調査と魚道の調査、河畔林調査、シンポジウム、鮭稚魚放流の活動です。

その後三井物産環境基金の助成を受けて 3 年間の活動の先頭にも石月さんが居ました。更に 2012 年、三井物産環境基金の 3 年の継続申請にあたり、石月さんが「水枯れの大河信濃川・千曲川に、鮭の道を拓く」のタイトルを申請、難関の継続申請が通りました。このタイトルにより申請が通ったと言っても過言ではないと思います。

■鮭の道サポーター基金



2012 年 三井物産環境基金の継続審査に申請した際のチラシ

三井物産環境基金の 3 年継続の重要審査項目に「助成金依存からの自立」がありました。

鮭は頭から尻尾まで食べられ捨てる所のない魚と言われながら、近年国内の河川では、イクラに加工する卵を採った後の鮭が食用にまわされず、やむなく肥料用に処分されている鮭が 4 割以上の状態でした。

この「もったいない」を解消するとともに、信濃川の電力の消費地である首都圏の人々との交流・啓発に取組み、支援金に対して鮭の加工品でお返ししてゆく「鮭の道サポーター基金」を 2013 年に立ち上げ、助成金だけに依存しない持続可能な活動を目指しました。

1 口 5,000 円とし、お返しに能代川で捕れた鮭を使い①鮭の味噌漬け 8 切れ、②ちゃんちゃん焼き用の鮭、③鮭のイクラ醤油漬より一つを選んでいただくものでした。

会員を中心に PR を行い、初年度は 43 口の応募がありました。2 年目は 64 口、3 年目は 92 口と増えました。

■信濃川・千曲川の鮭の遡上

当時、新潟県境に近い JR の宮中取水ダムまで鮭の遡上数は 40 ~ 60 尾の二桁がやっとでした。当会が 2007 年から鮭の稚魚放流を行いました。地元の稚魚放流もあって、2009 年は成長した親魚の一部が遡り始め、待望の 160 尾の三桁に、2010 年 146 尾、2011 年 135 尾、2012 年 297 尾、2013 年 408 尾、2014 年 736 尾、2015 年には 1,514 尾の遡上となり、ついに四桁の遡上数となりました。

当初より私たち新潟水辺の会が目指したのは、信濃川、千曲川で鮭などの魚類が遡上、産卵し、降下できる普通の河川の復活で、鮭の遡上はそのシンボルです。

2007 年から始めた鮭の稚魚放流は 10 年で 190 万尾を超えましたが、当会が稚魚放流を続けるのは限度があります。その為、発眼卵を河床埋設して自然に委ねる「鮭の発眼卵河床埋設放流」にシフトしていきました。

三井物産環境基金の助成が終えて 4 年、信濃川の支川黒川や宝川で「鮭の発眼卵河床埋設放流」を行い、その技術を確認しつつあるのは、信濃川ファンクラブ (2010 年解散) からの寄付や関係機関からの助成と鮭の道サポーター基金によるものです。

■レッドマウス病の発生

順調に進んだ鮭の遡上でしたが、平成 27 年 2 月石川県水産総合センター美川事業所で、サケ科魚類の細菌性魚病のレッドマウス病が発生しました。この病気は人に移ることはありませんが、ほとんどすべてのサケ科魚類に感染すると言われています。

特に長野県はイワナ、ニジマスの養殖場が多くあり、養殖魚への感染が懸念されました。長野県から自粛要請を受けて、我々はやむなく長野県での鮭の稚魚放流及び発眼卵の河床埋設放流の活動を中止しました。

■鮭の道サポーター基金の終了

2016 年鮭の供給元である能代川への鮭の遡上が激減、イクラを採るだけで鮭の道サポーター基金の加工に廻す鮭が無い状態となりました。

その後長野県での鮭の稚魚放流が 17 年振りに再開されたことや、長野県の方々が加茂川や能代川に遡上する鮭を見学するツアーで毎年来てくれる事により、当会の信濃川最下流の活動は役目を終えたと判断し、鮭の道サポーター基金を終了することとしました。

今後は鮭発眼卵の河床埋設放流技術を確認し、将来レッドマウス病終息の際は、上流長野県のサポーターとして発眼卵埋設のお手伝いをしたいと考えています。

最後に鮭の道サポーター基金にご協力いただきました皆様にあらためて感謝申し上げます。

副代表世話人 加藤 功

「民衆の自然観」と「国家の自然観」 ～「山川草木悉有(しつう) 仏性」と近代科学技術思想～

■はじめに

明治時代に近代的科学技術が導入されてから、富国強兵・殖産興業を急ぐあまり、自然は収奪と克服の対象となった。いわば「国家の自然観」のもとで、日本の自然は「国土」と捉えられ、その開発が進められた。それまで、庶民は身近な自然と共生し、自然に生かされていることを自覚しながら、生業を立てていた。日本人であれば誰もが「山川草木悉有仏性」で表現される自然観を有しており、これがいわば「民衆の自然観」であった。

その「国家の自然観」と「民衆の自然観」が、明治維新以後の150年間、軋轢を起ししながら進展し、今や「国家の自然観」が国民に浸透し切って、「民衆の自然観」は消失し、国民は自然から乖離していることに安住を覚えている。足尾鉍毒事件(1885年顕在化)、水俣病(1956年確認)、新潟水俣病(1965年確認)そして2011・3・11福島原発事故などは、その軋轢の象徴といえる。

■「山川草木悉有(しつう) 仏性」～「民衆の自然観」～

「山川草木悉有仏性」は、動植物や人間のみなならず、土や石、水なども含め、自然界のあらゆるものが平等に仏の心を有しており、すべてが関係しあって存在しているという考え方である。この考え方は天台宗の最澄(766/767～822)が唱えた「草木国土悉皆成仏」などをへて、鎌倉時代初期の親鸞や道元などの新しい仏教の布教とともに明確になった。しかし、縄文時代から自然のあらゆるものに神が宿ると考えてきたアニミズムと仏教が融合したものである。

この思想の本質は、自然の中のあらゆるものが平等であるが、その中で人間だけが“我”があり、その関係性から外れ、他の命をむやみに収奪する“うしろめたい存在”であるという考え方である。そして、その“うしろめたさ”を自覚して生きていくことが肝要というのである。その考え方の表れとして、我われはお盆の期間だけは殺生をしないと、食事の時に、いただく命に感謝して、“いただきます”という言葉が発する習慣を持つようになった。こうした生きることへの謙虚な姿勢は日本人の大切な特性でないかと考えている。

私が製作委員会代表を務めた映画『阿賀に生きる』(佐藤真監督、1992年完成)は、阿賀野川沿いの新潟水俣病に見舞われた人たちが「山川草木悉有仏性」の結ぶ合う世界から引き剥がされて、近代文明の奈落の底に落とされながらも、謙虚で誇りをもって生きている日常を映している。ここに登場する老人たちは、平凡な庶民にすぎないが、己の生き方がこの世でうしろめたい存在であることを明確に自覚していた。それは、老夫婦の痴話喧嘩や鮭の鉤流し漁の語り、窓の割れ目から室内に入って咲く朝顔の映像などに現れている。

親鸞の言葉に「善人なおもって往生を遂ぐ、況や悪人をや」があるが、一般庶民が「山川草木悉有仏性」を体得していたことは、「賢者なおもって自然の摂理を覚る況んや凡人をや」と言っているように思われる。

■「国家の自然観」の貫徹～新潟水俣病の発生～

私は1974年新潟大学に赴任したが、最初に驚いたことは、信濃川も阿賀野川も徹底した水力発電開発が行われ、いわば発電のためだけの川になっていたことである。しかも、その電力はほとんど関東に送られ、阿賀野川沿いの磐越西線(1914年全通)、只見川沿いの只見線(1971年全通)、信濃川沿いの飯山線(1929年全通)は電化されず、いまだにディーゼル車が走っている。信濃川ではかつて河口から約290km上流の長野県松本まで、阿賀野川でも河口から約250km上流の奥只見まで鮭や鱒が無数に遡上していた。鮭や鱒は川沿いの住民にとって、縄文時代以来、重要な食糧源であったのだが……。

阿賀野川では17基のダムがある。その最初に造られたのが鹿瀬ダム(1928年竣工、堤高32.6m)であり、その電力は、昭和電工でアセトアルデヒドの製造に使われ、有機水銀が垂れ流され、新潟水俣病の発生原因になった。自然における複雑な関係性の中で、長い時間をかけて育まれた川沿い住民の生活体系が、ダムや汚水の垂れ流しで完全に破壊されたのである。足尾鉍毒事件や水俣病も近代文明によって人と自然の共生関係が断ち切られたが故に発生したのであるが、そのことへの認識の怠惰が阿賀野川での水俣病を再発させてしまったのである。

■「おわりに

現在のように通信・交通手段が発達し、あらゆるものがグローバル化した時代に、世界の国々と競争していくためには、中央集権的な「国家的自然観」が必要であることは理解できる。しかし、その「国家的自然観」を押し通すことになると、再び民衆にさまざまな軋轢を強いることになる。少しでも「民衆の自然観」に配慮することで、その犠牲を緩和することはできるはずである。ただ、現代の民衆はすでに、自然から乖離していることに快適性を覚え、自然との煩わしい付き合いを望まなくなっている。しかし、その快適性は見せかけのものでしかない。もう一度少し煩わしいかもしれないが、便利すぎる日常を反省して、自然と人との直接的な関係性を復活させ、「国家的自然観」を押し戻していく「民衆の自然観」の再構築が必要でないかと考えている。

顧問 大熊 孝(新潟大学名誉教授)

新潟の水辺イベント情報

○鳥屋野潟の恵み「空芯菜を使った料理教室」

10月1日(火) 13:00～15:30

場所：いくとぴあ食花 食育花育センター調理室

参加費：700円

詳細は当会 web サイトにて

○第12回いい川・いい川づくりワークショップ in 滋賀・京都

10月5日(土)～5日(日)

主催：いい川・いい川づくり実行委員会

詳細は <http://www.mizukan.or.jp/>

当会も「とやの潟がってんプロジェクト」を発表します。

○とやの物語 2019

10月6日(日)

場所：新潟県立鳥屋野潟公園・いくとぴあ食花

内容：Eポート・板合せ乗船体験、子ども環境サミットなど

主催：とやの物語実行委員会(当会も参画)

問合せ：同実行委員会事務局

電話 025-223-7168 メール mado.c@city.niigata.lg.jp

○通船川河口の森美化活動と通船川川掃除

10月19日(土)(予備日26日(土)) 09:00～11:30

集合場所 通船川河口の森

広場の草刈り、生け垣の剪定、川のゴミ回収

詳細は当会 Web サイトにて

○にいがた市民環境フェア出展

10月20日(日) 10:00～15:00

場所：亀田駅前地域交流センター

来場無料

主催：にいがた市民環境会議

問合せ：同会議事務局(新潟市環境政策課内)

当会も「とやの潟がってんプロジェクト」を紹介いたします。

○(公財)山口育英奨学会 自然環境保護活動助成事業報告会

10月30日(水) 13:00～17:00

場所：(公財)山口育英奨学会 山びこ館(長岡市小国町)

平成30年度に助成をいただいた「里山竹林再生と里潟再生が循環する五方よし竹筏事業」について報告します。

○「越後平野の暮らしと舟 - つくる・語る・受けつぐ-」シンポジウムと和船の公開制作

10月26日(土)～11月2日(土) 公開制作・進水式(中川造船鉄工所にて)

11月3日(日・祝) 13:00～16:00 シンポジウム(キガタヤにて)

アメリカ在住の舟大工ダグラス・ブルック氏の和船公開制作と同氏の講演・パネルディスカッションによるシンポジウム。シンポジウム参加費1,000円。詳細は当会HPにて。主催・問い合わせ：荒川洋子(当会会員)、kigatayaproject@gmail.com(当会後援事業)

○にいがた環境フェスティバル 2019 出展

11月10日(日) 10:00～16:00

場所：万代島多目的広場「大かま」

来場無料

主催：新潟県(県民生活・環境部環境企画課)

環境に関する講座・展示を総合的にを行います。当会も「とやの潟がってんプロジェクト」を紹介いたします。

○信州長野からの鮭の遡上見学会

11月19日(火) 信州水環境マップネットワーク

11月30日(土) 長野市カルチャーセンター

信州長野からの皆さんの加茂川・能代川の鮭の遡上の見学を案内します。

○先生のお話と気楽な話し合い～家族のために私たちができること～

11月23日(土・祝) 13:30～16:00

場所：新潟市東区プラザ 多目的ルーム2

新潟大学医学部坂井さゆり教授の講演「『もしものとき』の意思を家族で話し合う～アドバンス・ケア・プランニング(人生会議)をご存知ですか?」と話し合い

主催・問合せ：話し合い文化推進にいがた(新潟市市民活動支援センター内 Tel 025-224-5075)

○新潟の水辺シンポジウムと望年会

11月下旬から12月上旬(日時・会場の詳細は未定)

とやの潟がってんプロジェクトの取組の報告や今後の展開、シェア型水上体験プラットフォームの展望などをテーマに行う予定です。また、シンポジウム終了後は恒例の望年会の開催も予定しています。

編集後記： 水辺の会では総務も担当していますが、重要な仕事のひとつとして、会議などの「日程調整や連絡」があります。電話やはがき、メールなどの方法で行なっていますが、相手によってそれらを使い分けて、連絡しているのが現状です。そこで考えたいのがスマホの活用です。現在、スマホの利用率は世代全体で85%、60歳代でも70%だそうです。中年の方がLINEを上手に使っているのをよく見ます。LINEはアプリケーションをスマホに入れないと使えないのですが、アプリを入れなくても「スケジュール調整」に便利なツールが有るようです。(調整さん、伝助など)また、遠方も参加できる「テレビ会議」のアプリも出ていますので、会議の方法も変わってくるかもしれません。(Skype、Zoomなど)

当然、これらの使い方の勉強会は必要ですが、これからの市民活動の運営スタイルも変わってくるかもしれません。今後、出来るだけ会員の負担が少なく、効率的な方法を考えてゆきたいと思います。 編集人：森本 利

●発行：特定非営利活動法人新潟水辺の会

●事務局 〒950-2264 新潟市西区みずき野4-7-15 大熊方

Phone 025-264-3191 (留守番電話の際は伝言をお願いします。)

●ホームページ <https://niigata-mizubenokai.org> ●メール info@niigata-mizubenokai.org

●会員数 個人会員95人、法人会員5団体、家族会員6人、賛助会員7人、顧問3人(2019年9月1日現在)